

躍動する息吹の先に

熊谷ダイナミズム 息づく動の記録

▶31◀

熊谷の俳人、金子兜太氏は「林間を人ごころと過ぎゆけり」という俳句で、雑木林の狭間を往来する熊谷人の生き生きとした姿と力強さを描いた。

原始時代から始まる熊谷の歴史は、この地で生活した人々の動きによって受け継がれてきた。人類の動的な文化は、古きものを今に伝え、未来に託すという日常の繰り返しによって生み出され、強さや速さ、距離、高さ、正確性、美を追求する競技へと進展した。

この連載では、「踊る塩輪(はにわ)」を起点に、祭礼を盛り上げる伝統の技芸、多様なスポーツ競技、修練し高みを目指す身体的な芸術などに着目した上で、熊谷

の「ダイナミズム」を探索し続けた。国宝「歓喜院聖天堂」の彫刻、遺跡出土品、絵画、写真、郷土芸能、俳句など「動」の記憶を示す有形・無形の歴史遺産と対話しながら、新たな視野に立つ記録化を目指した。

アートの融合



塩古墳群で跳び上がる筆者
(平山雄浩氏提供、2021年)

今の時代を開拓する熊谷のダイナミズムについて想起すると、身体の動きとアートの融合というテーマが見えてくる。2020年、俳優の森山未來さんのショートフィルム監督作品「in-sid e-out」が、熊谷の塩古墳群などで撮影された。ダンスと舞踊の演出が、熊谷の風景と交差し、鮮明な印象を与えている。

家ノスクリプカリウ落合安奈さんは、夏の風物詩「熊谷つつわ祭」の躍動感にインスピレーションを受け、先進的な作品を発表した。熊谷の歴史文化や自然と、人間の動的なイメージを重ね合わせ、現代のアートとして表現する試みは世界に向けた情報発信の可能性を有している。

新型コロナウイルスの感染拡大により、東京五輪・パラリンピックが延期されるなど、スポーツ大会や祭礼も中止や縮小を余儀なくされ、人々の動きも抑制される傾向が強まった。新たな生活様式の必要性を前に、多くのスポーツ文化や伝統芸能は大きな転換点にある。

熊谷ダイナミズムの旅は終幕を迎えるが、今後も熊谷人の根源にある情熱的な「動」の息吹を意識し、独自の方法で表現したいと考えている。そして、私は塩古墳群に立ち、跳び上がった。新たな旅が始まることを想像しながら。

(熊谷市教育委員会 山下祐樹)

おわり